

女性小学校教師の化粧度と心理特性、およびストレスとの関連について

発表者：居内 瞳

指導教員：中間 玲子

1. 問題と研究目的

小学校教師は一般女性に比べて化粧が薄いように感じられる。小学校教師の化粧が薄い原因としては、化粧が維持しづらく、化粧をしないという選択になりやすい特殊な環境であることが考えられる。前者の具体例としては、汗をかきやすく化粧が崩れやすいことや、化粧直しをする時間がないといったことが挙げられる。後者の具体例では、周りの目を気にしたり、周りの職員の化粧度に合わせたりしていること、また、小学校が閉鎖的で、勤務中に会う相手が児童と同僚だけであること、教育的な面を考慮していること、服装が軽装であること、さらに、ストレスが多く外見に対しての優先順位が低くなっていることなどが考えられる。

一般女性を対象にした研究では、化粧には自信や満足感を増す効果や、不安や抑うつ、疲労といったストレスを軽減する効果があること、さらには積極性の向上、リラクゼーション、気分の高揚、安心感の増加などの効果があることが明らかになっている。また、一般女性を対象としたときに、化粧行動と関連する心理特性として、賞賛されたい欲求・拒否されたくない欲求、男性性・女性性がある。一般女性を対象にした研究をもとに考えると、賞賛されたい欲求・拒否されたくない欲求が強い人、女性性が高く、男性性が低い人ほど化粧度が高いと考えられる。

このような、一般女性を対象にしたときにみられる化粧の心理的な効果（本研究ではストレスの軽減効果に限定する）や、化粧と男性性・女性性の関連、化粧と賞賛されたい欲求・拒否されたくない欲求との関連が、上記のような特殊な環境であり、化粧度の低い女性小学校教師を対象にした場合でもみられるかを検討することを本研究の目的とする。

2. 調査方法

兵庫県下で働いている女性小学校教員 102 名を分析の対象とし質問紙調査を行った。調査用紙の質問項目の構成は、調査協力者自身について 6 項目、松本(2005)が用いた「化粧度」について問う項目 8 項目、菅原(1986)が用いた「賞賛されたい欲求」・「拒否されたくない欲求」について問う項目 9 項目、山村(2010)が用いた「バーンアウト尺度」17 項目、男性性・女性性は、東(1990;1991)によって日本語版に作成された「BSRI 日本語版」から、社会的望ましさを表す 20 項目を除いた 40 項目を用いた。

3. 結果

まず、女性小学校教師の化粧の特徴を明らかにするために、女性小学校教師の化粧度と一般女性の化粧度を「女性の化粧行動・意識に関する調査 2012」（ポーラ文化研究所, 2012）の資料を参考に、年代別・化粧品別に比較したところ、どの年代においても一般女性のほうが化粧度が高かった。

さらに、女性小学校教師の化粧度に関連する要因を検討するために、通勤方法、年齢、既婚・未婚の 3 要因をそれぞれ独立変数とし、化粧品の種類を従属変数としてそれぞれ二要因分散分析を行った結果、年齢と既婚・未婚の要因で交互作用が有意であった。また、「状況に応じて化粧度を変えるか」（以下質問項目 K8）について関連する要因を検討するために、K8 と年齢、通勤方法、既婚・未婚の要因ごとに一要因分散分析を行った。その結果、年齢の要因のみ効果が有意であった。

次に、女性小学校教師の化粧度と心理特性、およびストレスとの関連性について検討した。化粧度と各尺度との相互相関を見るために、ピアソンの相関係数を算出した。その結果、拒否されたくない欲求、ストレス、女性性、男性性との間では相関がみられず、化粧度と賞賛されたい欲求でのみ、相関がみられた。

4. 考察

私は、女性小学校教師の場合でも一般女性と同じように化粧の心理的な効果や心理特性との関連があると考えていた。しかし、今回の結果では、女性小学校教師を対象にした場合では、化粧の心理的な効果はみられず、化粧と心理特性との関連では、賞賛されたい欲求との関連しか見られなかった。

また、女性小学校教師の化粧の特徴について明らかになったことは、どの年代においても一般女性よりも化粧度が低いことである。これにより、普段から感じていた女性小学校教師の化粧度の低さは、事実であることが明らかになった。

次に、出勤時の化粧度に影響を与える要因として、通勤方法の影響は見られなかったが、年齢と既婚・未婚の影響は見られた。これは、女性小学校教師が、化粧を「女性のマナーとして最低限するべき化粧」または「肌を保護するための化粧」という捉え方をしているからだと考える。この場合、化粧は自分をより魅力的にみせたり、素颜とは違う自分にみせたり、また、よりおしゃれにみせたりする目的は少ないことから、化粧をしたときの化粧の心理的な効果は減少するのだと考える。一般女性の化粧は、女性小学校教師と比べ、ポイントメイクまで施されており、化粧の効果もみられていることから、一般女性は、女性小学校教師よりも「自分をより魅力的にみせるための化粧」という捉え方をしていると考え。その場合、化粧をすることによって自分に自信や満足感が得られ、気分も高揚するため、ストレスの軽減などの化粧の心理的な効果が得られるのだと考える。一方、女性小学校教師では、一般女性において見られるような、ストレスを軽減させるような心理的な効果は見られなかった。それは、このような化粧の仕方の違いによるのではないかと考えられる。

また、化粧行動と関連する心理特性である男性性・女性性との関連は女性小学校教師においては見られなかった理由についても、上記のような女性小学校教師の化粧の捉え方が原因であると考え。化粧をすることで、よりおしゃれにみせたり、外見をよくみせようとしたりする目的が少ないためであると考え。

さらに、賞賛されたい欲求・拒否されたくない欲求との関連については、女性小学校教師を対象にした場合、前者は関連が見られたが後者は関連が見られなかった。私は、彼女らを対象にした場合でも、この二者と化粧度には関連があると考え。しかし、拒否されたくない欲求と化粧の関連が確認されないのは、化粧を施す個人やその環境によって、拒否されたくない欲求が働いたときに、化粧度の方向に個人差があるからだと考える（より化粧度を高くする場合も低くする場合もある）。

以上のように、女性小学校教師の化粧は、一般女性においてみられるような心理特性との関連やストレスを軽減させるような心理的な効果は見られなかった。女性小学校教師としての化粧は、一般女性にとっての化粧とは意味や目的が違うのかもしれない。

主要参考文献

高木修・大坊郁夫・神山進 2003 「被服と化粧の社会心理学」 28-46,124-150

森地恵理子・広瀬統・仲田悟・久世淳子 2006 メイクアップの心理的な効果と生体防御機能に及ぼす影響
日本福祉大学情報社会科学論集 第9巻